

華人・華僑の移住とネットワーク

—関西の福清籍華人・華僑を中心に—

陸麗君（同志社大学客員研究員）

華人・華僑が日本への渡来は17世紀の半ばごろに遡ることができる。しかし、華僑の貿易商として、公然進出しえたのは明治以降である。このように、明治以降、大正、昭和の初期にかけて、中国の沿海地域（広東省、福建省、浙江省など）の、後に華僑・華人と呼ばれた人たちが日本に新天地を求めて、移住してきたのである。

言葉も分からず、資金もほとんどない多くの華僑・華人たちは、文字通り、裸一貫での出発であった。彼らはどのようにして、異国の地で生活基盤を築き、生きてきたのか、その中で、彼らたちのネットワーク、特に同族同郷的なネットワークがどのような役割を果たしてきたのか。それらの問題を解明するのが今回の報告の主な目的である。

福清籍の華僑華人を研究対象としたのは、彼らは戦前からの行商で強靱な同族同郷のネットワークが形成されてきたため、そのネットワークがもっとも顕著に考察できると思ったからである。

資料収集の方法として、華僑・華人に関する既存の資料収集及び華僑・華人たちへの聞き取り調査が主である。**本報告**は主に福建省福清籍の老華僑を中心に、彼らたちが日本で生きていく上で、同郷的なネットワークがいかに機能してきたかを考察し、日本で生活していくうえで、老華僑にとって、その同郷的なネットワークが不可欠なものであったことを解明する。

その上で、新華僑の同郷的なネットワークをも考察し、同郷的なネットワークも時代と共に変化してきたことを明らかにする。